

「偶然」－「必然」

小橋圭介

Chance - Inevitable

Keisuke KOHASHI

作品を作るうえで、どこまで自分の意図した通りに表現することが可能なのだろうか。

意図した通り、つまり「必然」性をもってして表現できているのか。そのような事を思う中、制作を行ううえで「必然」性や「偶然」性について考えるようになった。

まずは、それぞれの語句の意味を把握しておく必要があると思い以下に記載する。

偶然・・・何の因果関係もなく、出来事が起こる様。

必然・・・必ずそうなる事。それ以外ありえない事。

まさにというか、その通りではある。更に、私個人としては二つの語句にこのような印象を持つ。

偶然・・・受動的 人の意図や考えを越えるような、自己のエゴや欲とは無関係に発生する。

必然・・・能動的 自己の想いを具体化するために必要なもの。意志。

今回、作品制作に伴い自分自身の「手」をモチーフとして選択した。それは、自分の想いを外界に出す手段として使用頻度の高い「手」というものを、再度見つめ直そうと思ったからだ。制作上のポイントとしては、「線」という細かな表現の出来る描写方法を選択し、できるだけ自分の意志を作品に注ぎ込めないだろうかと考えた。更に、立体を意識しながら「線」や「色」に気を配した。具体的には、「線」は細い線を幾重にも重ね、密度を変化させることで立体感や表情をつけようと試み、「色」に関しては、青は陰影の深い部分、黄色等の暖色系は明るい部分と、色の持つ明度や彩度を意識した上で選択していった。

自身でモチーフ、構図、描写、配色などを選択していった。これは自分自身にとって「意志」のある行為であり、「必然」であると私は思う。

このようにして、描いた作品に水をかける。当然のように描いた線は水によって溶け出し、画面上を散布する。後は、水によって濡れた作品が乾くまでひたすら放置である。

水の中を漂う「色」を眺めていると不思議な感覚になる。「線」の密度は色の濃淡に変わり、水に触

れることで「面」として現れる。色は近隣の色と重なり合い新しい色を紡いでいく。水をかけることによって、どのような結果が得られるかは解らない。一つとして同じような結果になる事は不可能だろう。まさにこれは「偶然」だと私は思った。

その一方、このような考えに対し「フラクタル性」という考え方がでてくる。

フラクタル・・・どんなに微少な部分をとっても全体に相似している（自己相似）ような図形。

更に、芸術家の表現についてもこのように述べられていた。

「無意識のうちに同じような表現を繰り返す自己相似的な行為を行っており、偶然にできたにじみにも、一定の秩序がある。ほかし、にじみはフラクタル性を持つ表現であり、優れた作家は特に意識することなくそれを作り出す。」(注1)

つまり、いっけん「偶然」にもとれる行動であっても「必然」と言い換えられると言っているのだ。

もし、この考えが事実であったとしても、今現在の私の実力では実践困難だろう。

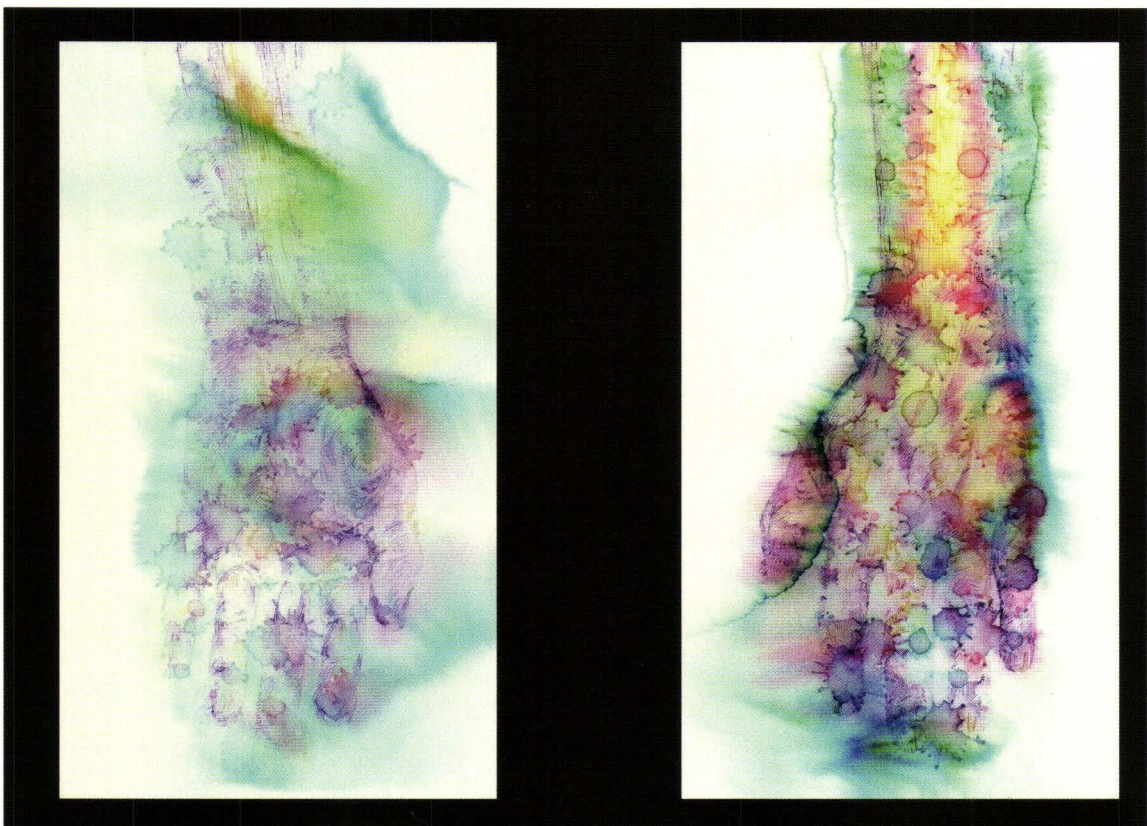
そして「意図した通り、つまり必然性をもってして表現できているのか」という最初の疑問に戻る。私が先ほど自分の意志で行ったという「必然」は、本当に必然なのだろうか。私の「必然」は、「必然」まで昇華されること無く、多くの「偶然」の中で成り立っているのではないか。

文献にある「偶然」の中にあるという「必然」、私を感じた「必然」の中に潜む「偶然」、この2種の境界を、はっきりと引くことは本当に可能なのだろうか？自身の技量の至らなさが、その問題を生じさせているだけで、先述したように「優れた作家は、特に意識することなく作品を作る」のだろうか。

その疑問を解決するためには、やはり「描く」以外に方法はないのだろうか。

注1：三井 秀樹 「和のデザイン理論」

毎日コミュニケーションズ P66, 2002



「偶然」- 「必然」
小橋 圭介

Chance - Inevitable
keisuke kohashi

2006年 鉛筆+CG
145×250(mm)